

日中戦時下の農村文化問題

——巡回映画の活動をてがかりに——

平賀明彦

●●●●●

はじめに

日中戦争の全面化以降、戦時体制の深化の中で、農村では、次第に生産条件が悪化する事態が進行した。その一方で、食糧増産の掛け声は日増しに高くなっていき、戦争末期には、乏しい生産資材と労働力で過大な生産目標を達成することが要請されるようになった。この過程は、段階的に進化した。一九三七年から三九年頃までは、植民地米に依存した、みせかけのものとはいえ、食糧需給が相対的に安定していたこともあって、農村には、戦時即応策の実行

という形で、特定軍需農産物の増産、応召などに伴う労働力不足補填のための勤労奉仕、馬匹の徴発と特定農業生産資材の節約などが求められたにすぎなかった。しかし、一九三九年の西日本と植民地朝鮮の凶作は、一挙に食糧事情に対する不安感を高め、戦局の膠着状態も影響して、食糧増産への政策的取り組みが叫ばれるようになった。次いで、一九四一年に入って、アジア・太平洋戦争への突入という新たな戦局を迎える中で、戦時食糧の確保のために、適正経営規模農家による生産増と自作農創設を進める皇国農村確立運動が取り組まれた。

この食糧増産の完遂のために、農村では、「農業報国精

神の涵養「農林国策の普及徹底」が進められたが、同時に、「農山漁村文化の向上」「農山漁村に対する健全なる娯樂の提供」という形で、農村文化問題が取上げられるようになった。食糧増産運動への農村民の総動員と符節を合わせたように、このような問題が声高に論議されるようになったのである。雑誌『農政研究』の一九四〇年八月号が、「農山漁村文化問題」を特集し、また、それに先立つことほぼ一年前の一九三九年六月号が、農村文化の代表的存在として「農村映画問題」を取り上げ、また、一九四〇年九月号が「農村映画への希望」を特集していたのは、その象徴的な現れであった。

そのような形で表面に現れた戦時期の農村文化に関わる論議は、どのような特徴をもっていたのであろうか。食糧増産が至上命令として否応無しに課せられたこの時期にそのような論議が現れたことの意味を、ここではまず、明らかにしてみたい。

その際、農村文化の具体的なジャンルとして映画を取り上げたのは、第一に、先の『農政研究』の例に示されているように、具体的に、農村文化問題が取上げられる場合に、文学、演劇、音楽、美術などの他の諸分野に対して、映画に関わる論議が圧倒的に多かったからである。映画は、当時の農村娯樂の中心に置かれていたのである。また、第二に、娯樂性との連関を持ちながら、他の異なった観点、す

なわち、国策宣伝の面から、映画は、当時注目を集めていた有力な媒体であった。その点からも、農村文化と映画の関係を重視しておく必要があるからである。

戦時期の映画に関しては、ピーター・B・ハーイの最近の重厚な仕事を含め、これまでに相当な蓄積がある。しかし、ここで問題にしようとしている農村文化問題としての映画の導入——それは、より具体的には、移動映画とか巡回映写といった形をとる場合が多かったが——については、必ずしも十分に明らかにされてこなかった。映画及び映画界と戦争との関わりを明らかにしようとした桜本富雄『大東亜戦争と日本映画』でも、巡回映画は、もっぱら学校教育の中での国民学校生徒への啓発宣伝として取上げられており、巡回映画団体の数や活動についても明らかにされていない。また、劇映画のみならず教育映画、文化映画、ニュース映画などについても幅広く、戦前戦後の映画史をていねいにたどった労作である田中純一郎の『日本映画発達史』及び『日本教育映画発達史』でも、情報局の肝いりで日本移動映写連盟が結成される以前の巡回映画の役割は重視されず、その実態についてもあまり触れられていない。ここでは、そのような映画史の研究状況もふまえて、この時期の農村への映画の導入の実態を明らかにし、その上で、戦時下の農村文化に関する先の課題意識に沿って検討を進めたい。

食糧増産と農村文化

戦時食糧増産運動に駆り立てられていた農村民の表情を、農村娯楽との関わりから問題にする議論は、一九三九年頃から目立って多くなる。すでに、一九二〇年代から、農本主義的農村改革論の旗手であった古瀬伝蔵にその主張の典型を見ることが出来る。すなわち以下の様である。

戦時下^①に於ける農民は実に過重な犠牲を払って居る。即ち最も多くの応召者を出したる上に、馬を徴発され、重税を負担し、軍需品供出の重大責任を負荷されて居る。殊に昨年以来農産物増産計画のために割当制の実施を受け、物質的にも精神的にも非常に重荷を負って居る。緊張の上に緊張を重ね一寸の隙もなく活動して居る。而も何の娯楽否慰安もなく営々として銃後の護りに精進している有様は、農村の実情を知るものは感謝感激涙なしには見られない実情である。

以後、関西と朝鮮半島の凶作に起因して、一挙に食糧不安が現実のものとなり、一方における戦局の長期化の中で、食糧増産が急速に国策の重要課題として位置づけられていく。また、「人口国策確立要綱」、「皇国農村確立運動」^②標準農村設定施策などの展開に見られるように、時局殷賑産業への農業労働力の流出を抑え、経営的中堅層を中核と

する生産的農村の建設を進める施策が、官製運動的取り組みの中で進められていった。農村の文化的施設に関する議論も、こういった動きと歩を揃えつつ、次第にトーンが強まっていた。「大東亜戦争を戦い抜き、大東亜共栄圏を建設して行くため、この際食糧自給確保及び農業人口増殖確保を飽くまでも貫徹致さなければならぬことを認め、之を閣議に於いて国策として決定し」たが、「農村文化問題もその観点から方針が指示せられてをる」と位置づけるのである。皇国農村確立促進方策の重要な一環として進められることになった標準農村設定要綱中で、中核として育成すべき適正経営農家の要件として「適度の自給経済に依り簡素なるも充実せる生活を為し農に即せる固有の文化を培養し得る如き余裕あるものなること」が掲げられていたことをとらえて、この適正経営農家は、経営的な安定度だけでなく、生活にゆとりがあり、将来に対し希望のもてる、精神的文化的側面でも安定感のある農家であるべきと解釈された。そのため、「農村を目して食糧生産の給源である、人的資源であると謂うのならはこの源泉保護を考えねばならぬ」。その方策は多々あるが、「文化的娯楽として都市に発達した映画、演劇、音楽（歌謡、演奏等）美術等の農村移入即ち慰楽会の巡回的開催」が有効な方法であると主張されたのである。

また、従来からの農本主義的色合いを持ちながら、都市

と農村との格差の問題を通して、農村文化をとらえようとする主張も見られた。

先ず第一は農村の文化を考える場合には、砂漠であった農村をして之を享受せしめることより出発しなくてはならないのである。即ち、一国の現段階的水準を示す都市文化は、農村に移流すべきである。都会に於ける俸給生活者や労働者に於て、安価な費用で享受出来る文化財や文化的精神は、同時に農村の人々も享受出来なくてはならないのである。即ち、農村では電気器具が不必要ではなく、映画、演劇が不必要なわけではないのであり……（後略）

食糧増産＝農村民の負担増であり、それを和らげるために、農村への健全な娯楽の提供をといった、このような論理に対して、農村の側から反発がなかったわけではない。例えば、以下のようなものである。

このごろ農村文化という言葉が一つの流行になった感じがする。全然かえりみられなかった時代より、いいといわなければなるまい。しかし、そうした声の中にはかなり方便的なものもあるようである。農村を重視するという考え方にしても、全く功利的にしか農村を見ていないし、また農村文化の振興を口にするにしても、まるで泣く子に餌をしゃぶらせるような考えで言っている人も見受けられる。（中略）今更農山漁村の

ひとたちに対して、思わせぶりなゼスチュアや媚態を示す必要がどこにあるか。米や木炭の有難さを今日になって始めて知り、その結果農民の労苦に感謝するという程度の利己的なあるいはセンチメンタルな同情や媚態は、心ある農民のひんしゆくを買うばかりであろう。

この時期の「農村文化」に関する問題の立て方の「問題性」を的確に言い当てた批判と言えるが、これは少数であり、まさに「農村文化」は「流行」現象となり、速やかにその施設を実施することが、農業・農村関係団体の一大関心事になっていったのである。そして、その際、最も力が注がれたのが映画の導入であった。

それは、農村の側からの要望でもあった。農村娯楽として何が適切かを、関係者に尋ねたアンケートの回答を見るとそのことが良くわかる。当時代議士であった杉山元次郎は、「農村の娯楽としては、やはり映画が第一である」とし、「年何回とプログラムを定め仕事とにらみあわせて農閑期にやる必要がある」と答えていた。また、富民協会の西村健吉も、「映画なんかが良いと思います（中略）映画だと経費もかからないし、見るものにとっても知らない世界が展開されて娯楽のうちにも教養を高めることが出来るのではないかと思います」と回答していた。また、同じ富民協会の木村泰次郎も、「農村娯楽としては映画をもって最高

位におきたい。それも事情の許す限り回数を多くしてやることだ」と述べていた。さらに、地域の農事団体や青年団体でも、例えば、茨城県の九重農業青年学校からは、「映画は最も大衆的であり、本村に於ては唯一の娯楽機関であると思う」という声が寄せられていたし、山梨県の岳村というところからは、映画を中心に演劇、踊り、音楽などの出し物を組み合わせて開いた慰安会の成功事例などが報告されていた。

また、「決戦下の農村文化運動に望む」という同様の特集記事の中でも、地域から寄せられた意見の中には、「映画、特にニュース映画の優先的配給」を望む声（福島県双葉郡上岡村）や、「無燈村にも映写班を」といった要望（北海道札幌市南十四条、あるいは「巡回映写並に移動演劇を積極的に、各地方町村（或は部落集会場等）へ年二、三回位」招いて欲しい（山形県東置賜郡高島町）といったものが多くを占めていた。

農村文化待望論、とりわけ映画の農村への導入を望む、こういった要望の高まりに呼応する形で、一九四〇年、社団法人農山漁村文化協会が設立された。産業組合中央会、帝国農会をはじめ、満州移住協会なども含め、二十余りの農山漁村関係諸団体を糾合したこの組織でも、文化的活動の中心には映画事業が置かれていた。第一回会合で、挨拶に立った初代会長有馬頼寧は、食糧増産の課題とこの事業

の関わりについて、以下のように述べていた。

農林省を始め、各団体に於て、農村に対し相当無理な註文を強要し、犠牲を払わしめて居るのであつて、殆ど何らの慰安と云うものを提供していない。一面に於て努力せしむると共に、他面に於ては何等かの慰安の方法を講じなければ、生産能率を低下することになると思う。そこで、最も健全であり、最も大衆的である映画を提供することは農民慰安の方法としても重大なる使命のある事と信じて居る次第であります。

食糧増産の担い手たる農村民への慰安の提供、その有効適切な方法として、映画が着目され、農林関係団体がその普及に取り組み始めたのである。

国策普及宣伝と映画

他方、この時期映画に関心が寄せられたのは、また、違つた側面からの理由もあつた。有馬頼寧は先の挨拶で、その点にも触れていた。

今日お互い農村指導の任にあるものといひましては、如何にしたならば最も有効適切なる指導が出来るか、或は農林国策の趣旨を徹底し得るか云う事に就ては相当御苦心になつて居られる事と思うのであります。従来行われつつあります処の講習とか講演とか

いうものも勿論必要であることは申す迄ありませんが、少なくとも現在の時局下に於ては一部の人々のみを対照とする指導なり宣伝であつては効果が薄い、どうしても大衆に呼びかける事が絶対に必要であると痛感して居るものであります。此の観点からいたしますと映画を利用することが此の目的に叶う極めて有効な方法ではないかと考えて居る次第であります。

こういった位置づけの背景には、これまでの国策宣伝活動が、上からの押しつけ的内容であり、それ故に精動化し効力を失つてしまつてゐることに對する批判と、農村指導者たちの苛立ちがあつた。古瀬は、早い時期からこの点について、「大官連中が地方に出張して一県下で一ヶ所や二ヶ所の講演会をやつた処で、それは殆ど何等の効果が^①ない」として、実際に農業報国連盟ができてからの半年間、実効のある活動は皆無であつたと批判していた。また、農村娯楽について寄せられた末端農村からの声にも、次のような批判が聞かれた。「最近では僅か二、三十戸の村落にも幾つかの組織が持たれ、それらの下部組織指導のため指導者が派遣されて来る。これら指導者の中には、「徒に時局便乗的な言辞を弄して事足れり」とする者も多く、それらの「言葉は犬の遠吠えにも似て、我々には唯うるさく感ずるだけである。随つて、これらの指導者が如何に山本元帥に続け！ アツツの英靈に応えよ！」と叫んでも、それは真

の叫びとして我々に迫る何物もない」と批判した上で、巡回映画、とくにトーキーの農村での上映を切望していた。上からの題目的な演説よりも、娯楽性もあり新味もあるトーキーをといったところであろうか。

農山漁村文化協会も、このような声を意識して、「講演などは最近余り歓迎されないよう」であるとした上で、「映画だと老人も子供も、男も女も驚くべき多数がよることで集まつてくる」ので、「宣伝、指導、娯楽の提供ということも容易に出来る」ことを重視し、映画普及事業に積極的に乗り出すことを掲げていた。

従来の国策宣伝の不徹底さに對する批判から、映画の普及を望む声が聞かれたわけであるが、これは、もとより、映画の持つ宣伝力に對する評価が前提になつてゐた。この点について、映画の作り手の側からの一つの試算を紹介しておこう。

當時、一本の映画の寿命は概ね二百日余り、すなわち、ほぼ三十週ほどだといわれていた。^②一日二回興行をしたとして四百回以上上映できることになる。これを一回に千人の観客が見たとすると、一本のフィルムで四十万人の観客動員が可能だつたことになる。さらに、一本の元フィルムから五十本のプリントが可能だつたので、この点も考慮に入れると、スクリーンを通して、一つの映画を、延べ二十万人以上の人が見る事ができる計算になるといふ。^③一本

のフィルムは耐久度やプリントの可能本数に關しては、むしろ、控え目な数字を元にしてゐるので、實際は、一本の映画の観客動員は六千万人とも言える。この説明は続く。そして、二千人を収容する劇場で、一日一回興行の演劇が、一か月のロングランを実現したとしても、たかだか六万人の観客動員でしかないことや、煩雜で、読解に相当の苦勞を要する書物という媒体の場合は、どんなに売れても百万部がせいぜいであることと比較して、映画の持つ大衆宣伝能力の高さが強調された。

このような表現ではないにしても、實際に、この時期、映画のもつ大量でかつ説得力のある宣伝力については、あちこちでその効果が力説されてゐたし、また、後に見るように、移動映画などを通じて、農村で多くの熱心な聴衆の反応に接した担当者たちは、むしろ、その体験を通して、⁽⁴⁾ 實感的に、影響力や宣伝力の強さをあらためて認識してゐた。

巡回映画方式

農村への映画の導入の方法は、巡回映写であつた。移動映画などとも呼ばれるこの方式は、とくに、教育映画、啓蒙宣伝映画の上映のために、早くから用いられてゐた。⁽⁵⁾ 初期の巡回のあり方は、講演活動の補助手段としてであつた。例えば、一九一六年にマキノ省三によつて作られた『都に

憧れて』は処女会などの団体で、農村子女の都会流出を防止するための講話会の際に使われた。また、一九一九年に作られた『誘惑の魔手』という映画は、廓清会の男女問題演説会に島田三郎の演説とともに上映された。一方、ほぼ同じ頃、各府県庁が、民力涵養運動の宣伝のために啓蒙的なフィルムの製作を委託し、常備するようになった。『生活安定の巻』『節米宣伝の巻』『公民育成の巻』などといったフィルムのほか、交通安全、防火、衛生などに役立つ映画が盛んに作られた。これらは一フィート三〇〜四〇銭で、当時としては相当高額だったにもかかわらず、評判の良い作品は何十本となく売れたという。まず、社会教育の場で巡回映画は利用され、各府県や市町村の教化団体、産業団体、教育会などでの需要が増えていったのである。当時、興行用映画フィルムが販売されることはなかったのも、もっぱら巡回映画の素材は、これら教育用、産業技術普及用、あるいは啓蒙的な映画だったのである。

学校教育の中で、映画利用が定着したのは、もう少し後で、一九二〇年代だといわれているが、決定的なきっかけは、一九二五年から輸入されるようになった十六ミリ映写機であつた。学校の教室を使用するため、映写距離を必要としなかつたので、安価で取り扱いが簡便なこの型式が学校現場で瞬く間に普及した。一九二八年、大毎、東日の両新聞社は、「フィルム・ライブラリー」を設置し、これら

常設館との営業上の軋轢をもたすことが懸念され、古いフィルムを持ち込んで農山村で不定期に興行を行う専門業者はある程度いたが、大手の業者はなかなかこのシステムを導入しなかった。官公庁、翼賛会、産業組合などがバックアップとなり、そういった点の問題がクリアーされてはじめて、移動映写は大規模な展開ができるようになるのである。

巡回映画の本格的展開

戦時期に入って、とくに目立って、この巡回方式で映画の導入を進めたのは大政翼賛会であった。一九四〇年までは、宣伝部に表1に掲げたような映画を揃え、希望により無償貸し出しを行っていた。国防思想、低物価政策、貯蓄増強、節米報国、食糧増産、製炭報国などの国策趣旨普及を旨とした作品タイトルとともに、劇映画仕立てで時局認識を涵養するための作品が目を引く。娯楽性に意を用いながらの国策宣伝という意図が窺えるが、この種のものには「時局臭さ」は否めない。

一九四一年に入ると、このような備付け映画の貸し出し業務から進んで、翼賛会自体が巡回映画に乗り出すようになった。年頭、外郭団体として日本移動文化協会を設立し、資材、人員の提供を朝日新聞社の協力に仰ぎ、二月末日か

ら、十八班の十六ミリ移動映写隊を表2のように各県に派遣し、試験的な試みとして活動を開始した。

この試験的な取り組みののち、移動文化協会の活動は活発化していく。三月には、すでに巡回班は九〇を数え、翼賛会製作及び指定の劇映画、文化映画を上映する映写会を各地域で開催していた。映画館をもつ町村は対象とせず、映写会は原則として無料とすることが規約として定められていた。三月からの四か月間に、全国三十九府県に延べ一二〇二回の巡回映画会を開催し、一回の観客動員数は、概ね八〇〇人から一五〇〇人ほどだったと記録されている。

同じ時期、ニュース映画製作部門を持つ新聞社なども、同様の移動映画組織を各地に展開していた。東日、大毎の新聞社の移動映画班は映画報国隊と称し、三五ミリ発声映写機二台を備えた班を、それぞれ十班組織し活動していた。映写班派遣の費用は新聞社負担で、観覧料は無料であった。六月二十日から八月二十六日までの間に、四一三地域で四三一回の巡回映画会を開き、延べ八四万五八六〇人の聴衆を集めていた。

最も多くの巡回映画会を開いていたのは、読売新聞社の映画奉公隊で、やはり、一つの班が三五ミリ発声映写機二台を備え、二〇班が各地を巡回していた。四月二十日から七月四日の間に、一〇九〇回、延べ、一七八万四三二七人

表1 大政翼賛会宣伝部備付け映画一覧

種別	タイトル	内 容
文化	物価停止令とは	物価停止令の解説
	海の要塞線	国防の重要性を解説
	共同作業	農村の労力不足対策としての共同作業について
	国策読本	廃品回収による消費節約について
	一銭の力	貯蓄思想を説く
	君達も戦わねばならぬ	社会に巣立つ銃後の戦士の心得
	興亜奉公日	興亜奉公日の実況と精神のあり方について
	繊維長期戦	一片のボロでもパルプ、火薬、輸出品のセルロイド玩具になる
	国防と資源 金属編	重要資源たる金属類の諸問題
	僕たちの覚悟	学窓を巣立つ青少年の覚悟について
	若き日本	明治神宮国民体育大会の状況
	新大陸	中国大陸での東亜新秩序建設の姿
	米と日本	節米運動について
	製炭報国隊	全国男女青年団中等学校生徒の木炭製造勤労奉仕の状況を、とくに作業困難な北国の様子を題材に描く
	日本の姿	『聖地高千穂』『敬神崇祖』『勤労の村々』の三部作
	豊野村	合理的組織と協力精神をもって努力実践する村の姿
	母と子の問題	工場地帯の託児所の保母の生活と託児所の状況
	靖国神社	靖国神社の由来を説明して日本精神発揚をめざす
	広東進軍抄	火野葦平の「海と兵隊」の映画化
	捕鯨	南水洋に活躍する日本捕鯨船の様子。鯨は代用食代用品
	西山荘	水戸の西山荘を解説
劇	起ち上がった少年	出征遺家族の自力更生
	五人の斥候兵	最前線に活躍する兵士の労苦を描く
	爆音	飛行機献納運動と村民の喜び
	村のラッパ卒	農村の食糧増産運動に有益であるとともに、都会人の反省を促す
	上海陸戦隊	事変当初の上海における海軍陸戦隊の決死的活躍
	噓しき町	町をあげて体位向上にいそむ白石町の姿
	五人の兄弟	健全な国民生活の姿を描く

* 種別の「文化」、「劇」は会報中の記載のまま

* 映画は全て、オール・トーキー

『大政翼賛会会報』昭和15年12月1日号

表2 日本移動文化協会の巡回映画開催状況

期 間	地 域	市町村数	映写会回数	観客数
3月15日～20日	福島県	6	6	6200
3月17日～29日	山形県	10	11	8000
3月26日～4月19日	青森県	11	11	6630
3月26日	千葉県	1	1	600
3月26日	神奈川県	1	1	400
3月27日	東京府	1	1	200
3月31日～4月5日	茨城県			
3月25日～4月5日	宮城県	11	11	4710
3月17日～31日	岡山県	32	34	20540
4月1日～13日	岩手県	7	7	4300
4月7日～21日	愛知県	4	4	1800
3月22日～4月3日	大分県	8	8	6400
3月23日～4月13日	宮崎県	15	8	5895
3月22日～4月13日	山形県	9	11	6600
3月22日～26日	福岡県	5	5	3000
3月31日	奈良県	1	1	400
合 計		122	120	75675

* 青森県、宮城県の観客数は、いずれも4月8日までの数
『大政翼賛会会報』19号（1941年4月30日）より作成

の観衆をスクリーンの前に集めていた。

農山漁村文化協会の巡回映写活動には、東宝が全面的に協力し、一九四〇年十月に、千葉県山武郡の農業組合で開催したのを皮切りに、以後、次第に活動範囲を拡大していった。映写班は、本部直属二〇班（三五ミリ発声映写機）、地方駐在四班（三五ミリ発声映写機）、府県支部に十一班（十六ミリ発声映写機）、計四五班で編成されていた。協会が直接主催するのではなく、地域の青年団や産業組合主催で、そこに派遣する形をとっていた。派遣費用は一回概ね三〇円、映写会を五か所以上連続開催できることが条件であった。翌四十一年三月までの開催状況は、三十二府県で延べ三六〇回、観客動員数は、三〇万六三〇〇人であった。

各巡回映画班の出張先には、鉱山や工場なども含まれていたが、その多くは、農山漁村であったと考えて差し支えないだろう。

これらの展開の様子をさらに年次を追って突き止めることは史料的に難しいが、最初に掲げた移動文化協会の一九四三年に入ってから活動振りがわかるのを見ておこう。記録によれば、映画フィルムの調達難などが叫ばれる中、五月一か月で、全国四十二府県で一九九〇回の巡回映写会を開催し、一五五万五七五人の聴衆を集めていたとあるから、その活動量は、より

表3 日本移動映写連盟の活動例

期 間	映画会名	協賛・協力団体	活動状況
9月1日から 平均2週間	重要鉱物非常増産週間	大日本産業報国会 ・ 鉱山統制会	平均3時間半の上 映
10月中旬の20日間	航空思想普及映画会	大日本飛行協会	映写隊13班
10月4日から 1週間	軍人援護強化週間	軍事保護院	映写隊26班 全国240ヶ所 (1府県平均5ヶ町村)
10月1日から 2か月近く	増産推進映画会	大政翼賛会	映写隊50班 19府県1100ヶ町村
11月から3か月	貯蓄奨励映画会	通信院貯金局	映写隊13班
11月20日以降	新穀感謝増産激励映画会	大政翼賛会	映写隊36班 19府県1000町村

主な使用フィルムタイトル：決戦の大空へ、愛機南へ飛ぶ、熱風、無法松の一生、富士に誓う、奴隸船、世界に告ぐ、潜水艦西へ、海軍戦記、大陸新戦場、姿三四郎、望楼の決死隊、風雪の春、シンガポール総攻撃、華やかなる幻想、海ゆかば

映配移動映写計画課「かくれたる功労者——映配移動映写隊の業績報告——」『映画配給社報 社内版』1944年1月1日号より作成

拡大していたといえそうである。また、徐々に移動映画組織の統合を進めていた社団法人映画配給社は、この時すでに、全国に五つの支社を持ち、各支部の普及課が移動映画隊の派遣を行っていたが、その活動状況を見ると、六月一か月で、一一九九回の映写回数、七二万五六七人の観客動員を記録していた。また、翌七月も、一か月に一一五〇回、六五万八八八人という数に上っていた。

また、実際に、移動映画組織の統合がなっていたからの活動状況を、同じ四三年の後半期について見ると表3のようであった。組織の一元化と情報局などの本格的バックアップ体制の整備により、大規模な全国展開が行われていたことがわかる。

都市部でもニュース映画ブームがおきた(1938年)



巡回映画班の活動状況

それでは、それら巡回映画班の活動振りはどのようなものだったのだろうか。具体的な活動記録をてがかりに、その実態に迫ってみよう。表4の記録は、一九四一年の二月中に、群馬県新田郡の六ヶ町村を巡回した映写班の様子である。これは、農山漁村文化協会と新田郡青年団との共同主催による巡回映画会で、全日程六日間の予定で行われた。

農山漁村文化協会から派遣された映写スタッフは三人、青年団の全面的支援があったために、興行そのものは、映写や電圧などのトラブルもなく、また、器材、人員とも移動もスムーズで比較的順調だったことがわかる。太田、桐生などの市部に近く、交通機関の便などの条件が比較的良好いせいであろう。後述するように、北海道や東北、あるいは、山村地域などの場合は、移動そのものが相当の重労働である場合が多かった。

会場は、おおむね小学校の教室をぶち抜いて作られたが、市場に急ごしらえで囲いを作って代用させるなど急場しのぎの場合もあった。聴衆は、児童生徒とともに、出征遺家族の招待者が加わっていたことが特徴で、このような催しの目的の一つが、銃後農村対策としての側面を持っていたことがわかる。児童生徒と一般村民のために昼夜二回の興

行が多かった。組織的動員があったにせよ、市部からの業者の興行も比較的地域にもかかわらず、聴衆は常に見慣れた一杯の状態であり、やはり、農村民の娯楽として映画が人気を集めていた様子が窺える。

プログラムの中では、児童生徒にとっては漫画が、一般村民には劇映画の評判が良かった。この例のように、文化映画は、そのドキュメンタリータッチの映像の新鮮さや科学性で人々の興味をそそる場合が多かったと言われている。それに対して、時局宣伝的な内容を持つフィルムについては、評価が定まらない場合が間々見うけられた。

この巡回映画班に先立つこと三か月前の、前年十二月に、千葉県を巡った班の記録も残されている。そこから、また、特徴的な部分を抜き出してみよう。

第一日目の三川村というところでは、「三川村新体制建設連盟」発会式の記念行事の一つとして、産業組合員の慰安もかねて「農村映画の夕」と題して開催された。会場は、やはり小学校、裁縫室と二教室を取り外し、講堂にして開演。六時開演、八時四〇分終了で、聴衆は鈴なりであった。映写は、機械の故障一回とプリント切れで、三度中断。また、後方席では、発声の聞き取れないことがあり、必ずしも好調ではなかった。

二日目の会場は、公会堂と称する古い芝居小屋。信用購買販売利用組合の主催で、昼夜二回の公演。昼間は、午後

表4 移動映写班日記

2月9日	生品村	青年団4人がリヤカー付き自転車ですタッフ3人と8個の器材の荷物を運搬。小学校の教室を3つ連ねた会場。800人余りの聴衆。小学生と婦人が多い。6時半開演、9時10分まで。「九段の母」が好評。月1回くらい、近隣の太田、桐生から興行師が来て、古い映画をかけるが、30銭から40銭くらい。
2月10日	強戸村	強戸村からの迎いの自動車で移動。小学校の教室3つを連ねて会場設営。郡の教育会所有の暗幕を使用。2時開演4時半第1回終了。昼間映写だったが支障なし。700人余りの聴衆。内400人は小学生。他は、出征遺家族の招待者。6時40分第2回目開始。9時15分終了。聴衆900人で超満員。6割くらいが婦人で、やはり「九段の母」が大好評。
2月11日	島之郷村	青年団がリヤカーで器材を運搬。スタッフは東武東上線で移動。小学校の教室3つを連ね会場設営。暗幕も先日と同じものを使用。1時45分開演4時15分終了。750人余り。小学生が500人、家政女学校の生徒が180人。残りは出征遺家族の招待者。午後7時第2回目開始。約1000名の聴衆。廊下に溢れる超満員で、蒲団持参のお年寄りも多い。途中10分間の休憩。警察からの依頼で、学校の先生から防火の講演。9時半終了。
2月22日	綿打村 字金井	自動車で移動。青物市場が会場。60坪ばかりの屋根だけの吹きさらしの建物なので、青年団員が周りに筵やトタンで囲いを作る。しかし、床はコンクリートで埃だらけ。7時開演10時半終了。聴衆約650名。婦人が4割で割に少ない。
2月23日	藪塚本町	器材は自動車で移動。小学校の教室3つを連ねた会場。暗幕は以前のもを使用。昼の聴衆は、高等科までの全校生徒と教員で1000人余りの盛況。午後7時第2回目開始。9時半終了。聴衆は750人。
2月24日	世良田村	自動車です器材とともに移動。小学校講堂が会場。女子青年団の主催で、すでに前売り券を1000枚完売。農山漁村文化協会の方針に基づき、団員は3銭、一般は10銭に設定。午後2時開演4時半終了。高等科までの全校生徒1400人。午後7時第2回目開始。9時半終了。約1200人で講堂に立錫の余地なし。婦人が6割ほど。
全体の評価	日々の連絡が順調。映画機の調子も良好で、画面も明るく、音質も普通、電圧もトランスの助けで100ボルトを維持し映写もうまく進行。フィルムもニュープリントで一度の切断もなし。	
番組評	漫画『め組の喧嘩』—小学校児童らに圧倒の人気。 文化映画『地蜂』、『てんぐさ』—小学校低学年には難しすぎたが、高学年、高等科生徒には理科の参考として適当であったと先生の評価。 軍事保護院提供『更生の光』—各地で好評。エンドタイトルとともに拍手が起こることが多かった。 『製炭報国隊』—番組中で最も不評。写真そのものが冗漫で、意図明瞭を欠く嫌いがある。製炭報国隊を組織している村では、共感を呼び多少の拍手があった。 『雲月の九段の母』—各地で最も好評。浪曲ファンが多いため、雲月特別出演のタイトルだけで盛大な拍手がおこる。婦人の吸り泣きの声も随所に起こった。	

茂木永三「東上州の村を巡る一移動映写班日記」『農村文化』20巻4号（1941年4月）から作成

一時から小学校児童対象、夜は午後六時から九時まで。千名以上の聴衆が集まった。

隣村での翌日の主催も信用組合、会場は、小学校。設営した会場では、電圧が低く、音がまったく聞こえない状態で、電源に近いところに機械を移し替える必要から、急遽屋外映写に変更。それでも、一部の年寄りをのぞき、八〇〇人の聴衆は、七時半からの公演に最後まで席を立つ人がいなかった。風が起こるたびに映写幕が波打ち、また、月が出るたびに画面が薄くなったが、プリント切れ、機械の故障はなかった。

番組構成は、劇映画『プロペラ親爺』、文化映画『もんしる蝶』、軍事保護院提供の『更生の光』、『血染めのハンカチ』、それと漫画『め組の喧嘩』であった。児童には、漫画が人気を得、また先生たちは、『もんしる蝶』が教育的、科学的で良かったとの評価。多くの村民は、特に婦人たちが、『血染めのハンカチ』を、その他は『プロペラ親爺』に拍手喝采であったという。

この巡回班の場合も、移動その他の苦労は少なく、産業組合趣旨宣伝の一環として開催されているため、観客動員の面も含めそれらの協力が、実際に効果をあげていたことがわかる。先の例にも共通して、学校の協力体制も重要な要素であったことが窺える。映写技術上の問題としては、機械故障、電圧の低さ、プリント切れなどが多かったこと

がわかる。

これらは、比較的巡回の旅程が順調にいった場合で、地域によっては必ずしもそうはいかない場合も多かった。表5は、北海道での巡回映写会の一例であるが、器材運搬やスタッフそのものの移動に苦労している様子が窺える。また、必要な電圧が得られないため、部落全体の協力を得て映写にこぎつけたたり、音響の不十分な部分を活弁よろしく肉声で補ったりと、悪条件の中で映写会を実施している様子が伝わってくる。一回の観客数も四〇〇―六〇〇人であった。巡回映画についての記録では、むしろ、前二者のような事例より、このように僻村を巡る中での苦労談が綴られているものの方が圧倒的に多かった。

このように、地域的に巡回の苦労はそれぞれであったが、会場や興行の時間、方法など、映写会そのもののやり方にあまり大きな違いはなかった。

映写会そのものの手順についても、主催団体や担い手の違いによつて多少の異動はあっても、ほぼ同じ基本パターンがあった。これまで紹介した事例の中でも見られたが、定刻になり、聴衆が集まったところで、まず、国民儀礼がはじまる。この内容については後述するが、次いで、映写会開催の趣旨説明が行われる。「映写会を開催した主旨を徹底するための挨拶は」、「映写にうつってからの集団鑑賞する上によい結果をもたらすし」、移動映画事業の役割を

表5 移動映写班活動の一例

	会 場 開催時刻・映写時間	移動の方法。会場や映写前後の様子。映 写の実情など。	聴衆人数・その 他
第1日	劇場 7時開会	国民儀礼・村長の挨拶・映画配給社によ る移動映画の趣旨説明	駅3つを隔てた 山奥から上映会 のために参集
第2日	国民学校調理室	バスで移動。トーキーについて解説	全校児童320名
第3日	国民学校 夜8時から2時間	バスの便が悪く徒歩で移動。器材のみ運 搬依頼。開会のあいさつ。音響が悪いの で、発声の補助を行う。評判上々	600名余り。野 良着姿が多い
第4日	青年会館 昼間	バスの連絡悪く郵便自動車に便乗して移 動。電圧十分のため映写効果上々。移動 映写会の意義などについて解説。上映後 警防団の指揮の下に、団体訓練実施	400名余り
第5日	劇場	朝9時バスで移動。1時間半で目的地へ。 国民学校が会場の予定だったが、電圧が 低いため村の劇場へ変更。(乳幼児死亡 率が高いので、今度はその分野の啓蒙的 映画をとの希望あり)	600名余り
第6日	国民学校 夕方から	途中までバス。そこからは、バスに断ら れりやカーで12キロの山道を移動、正午 着。部落全戸約40戸が電圧確保に協力す るため消灯。感激し解説に熱が入る	200名余り
第7日	国民学校屋内運動場 夜7時半から	目的地の村から荷馬車の迎え。同じ村で 2日間開催。本日は下の部落	450名余り
第8日	夜7時半から	途中警報発令により中止	300名余り
第9日	青年会館	狭い会館一杯の聴衆。団体訓練の必要を 解説	400名余り

* 巡回映写はこの後も続けられたが、後は略した。巡回地は北海道内のどこかは特定でき
なかった。

深田斎一「巡映記」『映画配給社報 社内版』1943年7月15日号より作成

表6 巡回映画プログラム例

群馬県新田郡 (41年)	千葉県海上郡 (41年)	静岡県田方郡 (42年)
め組の喧嘩 (漫画)	め組の喧嘩 (漫画)	のらくろ1等兵 (漫画)
地蜂 (文化映画)	もんしろ蝶 (文化映画)	国の幸
てんぐさ (文化映画)	更生の光 (軍事保護院映画)	興亜馬車大会
更生の光 (軍事保護院映画)	血染のハンカチ (軍事保護院映画)	ニュース
製炭報国隊 (軍事保護院映画)	プロペラ親爺 (劇映画)	翼賛選挙
雲月の九段の母 (劇映画)		父は九段の桜花 (劇映画)

『農村文化』20巻2号(41年2月)、20巻4号(41年4月)、21巻8号(42年8月)の巡回映画に関する記事より

認知させ、「正しい発展の基礎ともなる」大事な役割をもつものと位置づけられていた。以後の映写会順序については、当事者の説明を参照しよう。

「フィルム」の上映順序も第一番目に「漫画」を写す。子供の多い農山漁村の移動映写会ではやむを得ないし、時間的にも(早い時間では引用者)大人が多く集まらないのも事実だから、どの移動映写隊でもやると思う。次に「文化映画」をやり、「ニュース映画」をやって休憩する。そして音楽班を同道している映写隊ではこの辺で音楽を公開し、又農村歌などを指導してやれば非常になごやかな会合になり効果的である。最後に「劇映画」を上演して終わる訳であるが、閉会と同時に、聖寿万歳を三唱して解散していただきたい。

これらを大体二時間半から三時間で終えるのが、一つの基本パターンであった。

実際に移動映写にどのようなフィルムが上演されたかは、必ずしも良くわからない。農山漁村文化協会の巡回映写班の活動では、表6のようなプログラムが組まれていたことが記録されている。構成の基本は同じであるが、各ジャンルの映画をそれなりに多種類備えていたことがわかる。確かに、前掲表3のように、四三年に入り、巡回映画の機構が一元化され、強力なバックアップの下で展開するようになってから、携行フィルムが豊富に、そして、メジャーなものになっていったのは確かだが、それ以前でも、農山漁村文化協会や大政翼賛会などの後援の下、それなりの体制を整えて巡回活動が行われていたと言える。

表7は、一九三八年に製作された時局関連映画を、雑誌『映画国策』から、また、表8は一九四一年の製作フィルムを、『農村文化』からピックアップしたものである。いずれも、それぞれの数か月分の新作紹介記事からとった。記事そのものの取り扱いが、雑誌の性格を反映していることを意識して収集したものであるが、誌面編集や掲載の仕方に体系性がないので、即座に傾向性等について特徴づけることは難しいが、

表7 時局関連映画一覧(1)

タイトル	概 要	製作・撮影ほか
国民精神総動員 産業編	国防上重要な資源の生産拡充、資源愛護、物資の更生利用を高唱し、科学総動員を説く。	文化起業株式会社提供
伸ばせ国力	税金がどのように国力伸展に貢献しているかを解説し、兵役と並ぶ二大義務である納税観念を涵養する。	加治商会製作
銃後の長期戦	木戸文部大臣の長期戦に対応すべき覚悟についての演説に続き、資源愛護、銃後産業戦士の養成、産業合理化の様子などを映し出す。	文部省製作
国民進軍譜	80億円の貯蓄の喫緊の要務であること、銃後国民の最大且つ崇高な義務であることを喚起する内容。	明興社映画部製作・ オールキネマ社発売・細川喜代松原作・後藤好蔵監督・山田忠治撮影
我等の青年団	郷土に根差し、友情と愛郷の精神によって自発的に組織された修養研鑽の青年団の活躍を映し出す。	文部省製作
国民皆泳	水泳の入門としての背泳ぎ、平泳ぎのやり方を解説。国民体位の向上という国策に沿うためにも、オリンピックで気を吐いた水泳熱を喚起し、海国日本の少年少女は必ず泳げなければならないと訴える。	文部省製作
試練の嵐	納税思想を涵養するための宣伝映画。	東京市役所・東京税務監督局監修・細川喜代松演出・高城泰策撮影
大自然を描く	昆虫の世界を題材にしながら、貯蓄奨励の緊要なことを解説する貯蓄報国をテーマとした内容。	文化起業社提供
お産と民族	多産と体位向上を主題とした内容。厚生省後援。原案指導は、厚生省人口問題研究会。	伊東弘構成・藤本修一郎監督編集・田中十三撮影。皇国文化映画協会製作。日本グランドナショナル映画社配給
神国大日本	明治大帝の御製十一首を主題にした内容で、日本大学松原宣博士、宮内省御歌所寄人千葉胤明が解説。国民精神総動員の国策に沿った第1編「時局編」が完成。	日大芸術科製作

(表7 続き)

タイトル	概 要	製作・撮影ほか
掲げよ日の丸	国旗日の丸をめぐる想い出や行進の様子、子供たちの愛着や尊敬を描く。	東京発声ニュース
起ち上がる蒙古	蒙古の風俗、生活、習慣等の紹介。	愛国映画社製作・三和商事文化映画部提供・伊藤重親指揮・荒木慶彦撮影・東海林太郎唄
防共十字軍	大戦末期のドイツの国内情勢、赤化革命、ナチスの勃興、コミンテルンの活動、フランス人民戦線、スペイン内戦、ファシズムイタリーの決起、支那赤化の危機の中に結ばれた日独伊防共協定など、時々刻々の時局を解説。	大阪毎日新聞社・東京日日新聞社製作。官公庁、公共団体に限り、深田商会映画部発売
伊太利少年義勇軍と陸海空軍	ムッソリーニ首相の統制下にある少年義勇軍の組織的訓練の様子やイタリー陸海空軍の精鋭を紹介。	帝国文化社・モリモト映画社
若き開拓者・満蒙開拓青少年義勇軍	茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇軍を題材にしたもの。	産業組合中央会「家の光シネグラフ」の一編。セカイフィルム
地下鉄の出来る迄	大阪市の地下鉄工事の実際に即して、近代交通機関としての地下鉄がどのようにできるかを解説。	寺田清本店映画部製作
八十億円	賀屋前蔵相の戦時公債消化の方針を述べた演説などにより、貯蓄報国を解説した内容で、大蔵省国民貯蓄奨励局指導の国策に沿った文化映画。	連合映画社
雲と太陽	ドイツ中央鉄道観光局作品。ドイツの一流文学者の解説を日本版に製作。世界に誇るドイツ文化映画の技術と表現を紹介。	東日・大毎映画社
馬は兵器だ	馬匹改良、繁殖などの方法につき解説し、無言の戦士の能力向上を促す。日本ダービーでの優勝の瞬間など、高速度撮影を駆使した興味深い映像。	東日映画課
友愛日本	1922年、欧州大戦の戦火をのがれて日本に赴いたポーランドの孤児400名を日本赤十字社が救護した美談を収録。外務省情報部、日本赤十字社、ポーランド大使館後援。	杉田亀太郎総指揮・長島万里編集・牧野周一解説・日本フィルム協会製作提供
海のますらを	商船学校練習船大成丸の鳥羽から越中島までの回航の爽快シーンを集大成。海国日本の姿を描く。	東亜発声ニュース

(表7 続き)

タイトル	概 要	製作・撮影ほか
国を挙げて	愛国行進曲の精神に基づく国民精神総動員の劇映画化。戦傷の勇士が尚も報国の一念から郷土のために勤労奉仕の叫びをあげる。内閣情報局推薦。	都商会製作・山田邦威原作・高波三郎脚色監督・都築嘉橘撮影
仰げば尊しわが師・わが母	頭の働きの鈍い亀市は、勤勉と純情により人々に愛されたが、戦場に赴き帰らぬ人となった。その名誉の背景には、師と母の慈愛と苦心があった。	振進キネマ社製作・井上麗吉原作監督
三人の斥候兵	戦線と銃後の美談を描いた時局映画。	国光教育映画社製作・三沢成光原作監督・大鶴日出夫脚色
蘇州の悲曲	蘇州戦線で散った戦友を偲び、湖岸で悲曲を口ずさむ。	黄光映画社製作・オールキネマ社提供。永井藍湖構成・小野隆司撮影
漫画 幸福の母	健康維持のために必要な早寝早起き、清潔な身体、適当な運動、休養などといったことを諸語に富む漫画で解説。	オールキネマ社提供・山根幹人原作脚色・鈴木宏昌作画
新郷	厚生省予防局による花柳病予防映画。	都商会提供
赤ちゃん読本	育児指導を目的とした内容。科学的な正確を期し、一説に偏せず、すぐ役立つ子育て法を分かりやすく解説。	医学博士中鉢不二郎指導・石本統吉監督・橋本龍雄・坪内英二撮影。芸術映画社製作提供
蠅の脅威	蠅が私たちの生活にもたらす衛生上の問題を描き、その恐ろしさを解説。衛生思想宣揚映画。	東京シネマ商会映画部
勝鬨	体位向上を進めるための啓蒙映画。日本結核予防協会の委嘱により作られた。	加治商会・山口順監督
弥次喜多再来東京見物	柳家金吾楼が伯父さん役となり、東京見物にやってくる。大辻司郎扮する甥がその案内をするが、滑稽百出の爆笑編に。	文化起業株式会社製作
漫画 マー坊の大陸秘境探検	万里の長城の彼方戈壁砂漠辺りの桃源郷を突如襲った赤化の魔手。我が愛するマー坊が、奇手縦横、赤軍を叩き潰して防共の凱歌を高らかに歌う。	佐藤映画製作所製作

* 当初は、「国策映画」「愛国・教訓劇映画」「衛生映画」「文化映画」「余興映画」のジャンル分けがあったが、それぞれの分類の明確な定義はなく、また、後に分類そのものがないので、ここでも省略した。

『映画国策』2巻5号～2巻7号(1936年5月～7月)の新作映画紹介欄などから作成

表8 時局関連映画一覧(2)

タイトル	概 要	製作・撮影ほか
深く掘れ	近衛首相の全農村への「土を深く掘れ」という呼びかけを導入に、深耕、有畜化、堆肥利用などの重要性、勤労精神による農業道の確立を説き、食糧増産の国策邁進に資する。	読売新聞社製作。埼玉県農民講道館協力。羽中田誠演出
うさぎの村	うさぎの毛皮と肉が前線兵士の大切な防寒具、食糧であることを強調し、その飼育方法も解説。養兔王国長野の風景と、子供たちとうさぎのふれあいを背景に美しく描いた国策映画。	東亜文化協会映画部製作
雪の村	秋田県の山奥の村に訪れたトーキー映写班。トーキーに初めて接する村人の驚き。丈余の雪に埋もれた山村の生活を背景に農村に娯楽をという国策の実践の様子を描く。	読売新聞社製作
農民劇場	山形県の村で活躍する農民劇団を描く。当初信用組合の宣伝を目的に作られた劇団が、村の中になくはならない存在となり、新体制の国策に沿った農村劇の役割を典型的に示す。	十字屋映画部製作。田中喜次演出
初島	戸数40戸余りの小さな島、初島で営まれている独特の共同生活の記録。	十字屋映画部製作。飯田心美演出
雪崩	上越国境での人口雪崩による我が国初の科学的実験の記録映画。雪崩の原因を探求するとともに、過去の雪崩対策の不十分なことを指摘した貴重な記録映画。	十字屋映画部製作。太田仁吉演出
冬期漁業	山形県の漁村の冬の様子を描き、7、8トンの漁船を駆って、荒波の中、必死の操業を続ける人々の生活を追い続ける。	十字屋映画部製作
日本の椎茸	自然孢子による栽培の時代から、現在の科学的な菌糸培養接種法に発展している椎茸栽培を取上げ、農山村の経済更生にとって有力な副業であることを説くとともに、栄養学的分析も試みる。	十字屋映画部製作。太田仁吉演出
雪と熱	雪と熱、雪と光の微妙な交錯を科学のレンズで解明した映画。雪の権威、黒田工学博士と山岳映画の第一人者、塚本閣治が山形新庄、新潟石打、上高地、志賀高原などにロケを行って収録した格調高い科学映画。	理研科学映画製作。西尾佳雄編集
学生報国農場	東京府下全中学生が、学業余暇を利用して江戸川の河床を耕起、50町余りの農場を建設した記録。農産物増産だけでなく、集団訓練、健康上の意義を強調。	文化起業社製作

(表8 続き)

タイトル	概 要	製作・撮影ほか
土の戦士	全国の中堅農家の青壮年より選ばれた1万5千人の農業増産報国推進隊の、茨城県内原での訓練を描き、至誠一貫の精神により教練、武道、作業に打ち込む姿から時局下の農民の使命を鮮明にする。農林省後援。	日本ニュース映画社 製作・農業報国連盟 指導
米と食糧の問題	食糧の問題を消費の側面から描き、米の家庭における無駄の排除、混食、代用食の利用などによる全国民一致しての食糧確保の必要性を説く。	大毎東日映写部製 作・佐藤博一構成
種馬の育成	農林省種馬育成所の模範的な育成、調教方法を解説し、高度国防国家建設に不可欠な馬の改良増殖に資することを目的とした内容。	山口シネマ製作・農 林省馬政局監修
血を統ぐもの	馬種改良の苦心の様子を、北は北海道十勝、青森、岩手から南は宮崎までカメラが駆け回り拾い集めた内容。	東日大毎映画部製 作・開田靖一構成
三河	北部満州興安省とソ連の国境近くの三河地方で開拓生活を営むコサックの生活ルポ。大農具を使った農耕、バター工場などを紹介。五族協和をめざす国策に沿って、楽土満州の様子を伝える。	満映製作・高原富士 郎監督
舢倉島	能登半島の沖合いの孤島のこの島には、毎年6月に輪島から海女たちが家財道具一式をもって渡ってくる。鮑、えご草取りで10月までを過ごし、ほぼ1年の生活費をかせいで帰る。その実像をカメラは追う。	東宝文化映画部製 作・中村敏郎演出
魚網の話	水産国日本の漁業にとって不可欠の魚網機の発明、発達を解説し、また、独特の漁労方法も紹介する。	深田映画部製作・坂 本為之監督
水産日本	トロール漁業、母船式の蟹、鮭、鱒などの遠洋漁業と鯿、鯿、鯿などの近海漁業の現状を紹介し、戦時下国民生活に、また外貨獲得に貢献している水産加工業の重要性を解説する。	朝日映画・日本水産 製作
新しき出発 —農村共同体—	農事実行組合が農会、産業組合に法人加入し、村当局と一丸となって、協同大政によって食糧の増産確保にあたることを強調した内容。	産業組合中央会・芸 術映画社製作・島木 隆司構成
大陸資源綿花篇	北京の華北産業研究所で栽培に成功した風土に適した綿花の品種を紹介。合わせて、中国の農民への技術指導の様子を記録したもの。	朝日映画・華北電影 製作・興亜院監修・ 吉田英男監督
里神楽	農山漁村の氏子たちによって代々伝承され、村の祭りに奉納する風習が残っている里神楽について、東京府下府中町を中心に記録したもの。	葛映社製作・大日本 文化映画協賛提供・ 新井博構成

(表8 続き)

タイトル	概 要	製作・撮影ほか
蜜柑と銀鱗	かつて寒漁村であった紀州の九鬼村が、鱈の大敷網の採用により見事に更生し、日本一の漁獲をあげるまでになり、戦時下の戦域奉公の実をあげている姿を描く。	読売映画部製作・羽中田誠演出
ラインランドの葡萄作り	ドイツ発祥の地といわれるこの地方の風俗を描きながら、山がちの地形の中、可耕地での葡萄と葡萄酒作りの様子を描く。	ドイツ国立鉄道観光局製作・日本映画社提供・ハンス・キウリース監督
村の保健婦人	過度の労働と衛生知識の不足のために、非常に高い乳幼児の死亡率を示していた愛知県の僻村が、保健婦の採用と母子保護所の開設により、ついに愛育村に指定された経緯を描く。	松竹文化映画部製作・丹生正監督
薬	われわれの先祖たちと薬の関係から説き起こし、現今パルプ原料として国策上重要な役割を果たしている薬の効用を紹介。資源愛護の念と戦時下物資不足の不安を科学的研鑽努力によって一掃すべきことを説いた内容。	野田商事映画部・長谷川衛撮影
阿波の木偶	300年の伝統を持つ淡路の人形浄瑠璃を演ずる一座と人形師の途な製作の苦心を、四国の風物の中に描く郷土芸術紹介映画。	大毎東日映画部製作・野口徳次演出
姫鱒	かつて一尾の魚の姿もなかった十和田湖で姫鱒の養殖に成功するまでの20数年の努力と忍耐を描き、戦時下食糧資源確保に力強く貢献する姿をとらえる。農林省水産講習所監修。	理研科学映画製作・後藤誠演出
鯛網	東日本屈指の鯛網漁場として知られる茨城県会瀬海岸の漁獲の実況と魚網の構造を紹介し、水産日本の力を示す。	
華やかなる幻想	失明した傷痍軍人音楽家が、死線を越えた苦悩の末、見事な交響曲を作り上げる姿を描く。戦時局下の国民意識に訴える内容。軍事保護院後援。	大映作品
明けゆく土	上総国を舞台に、村のために鳥流しとなった名主の次郎兵衛に託されて、忠実真摯に村を守り、主人の赦免を訴え続ける下僕市兵衛の姿を描く。立派に村を守った市兵衛と許されて村に戻った次郎兵衛が抱き合うラストシーンに忠節と勤勉の大切さが滲みでる。	村上元三原作・寺門静吉演出・新興京都撮影所製作

『農村文化』20巻4号～20巻6号（1941年4月～6月）の新作文化映画紹介欄などから作成

国策宣伝用に、また、農村向けにどのようなものが作られ、上映されていたかを知ることができよう。

一九三八年中の作品群には、雑誌の性格もあり、当時からすでに「国策映画」と呼ばれていた啓蒙宣伝フィルムが多い。例えば、文部省製作の『銃後の長期戦』は、国民精神総動員運動に使用するため、それ以前に製作された『支那事变』、『国民精神総動員演説会』に次ぐ三作目の作品であった。これらは、表8の中の、『深く掘れ』、あるいは農村向け国策宣伝映画の『うさぎの村』『雪の村』などへと引き継がれていくが、あとになるにしたがって、文化映画的な色彩を強くしているように見える。また、『国民皆泳』のように、国策宣伝のために作られながら、泳法解説のための高速移動撮影が高く評価されるような作品もあった。劇映画仕立てで精動運動の趣旨を盛り込んだものも多く、ドイツやイタリアの動員政策をドキュメンタリー風に描いた啓蒙宣伝映画と並んで、相当数のものが作られていたことがわかる。また、『衛生映画』という括りかたで紹介されていた一連の作品も目を引く。国民体位向上を軸にしつつ、育児や衛生観念の普及に努めていた厚生省の意向を受けたものであった。また、子供向けの漫画も一つのジャンルをなしており、ここにある『マー坊の大陸秘境探検』は、以後シリーズ化され、『鉄血陸戦隊』『南海奮戦記』『大陸宣撫隊』『落下傘部隊』などが作られた。

一九三九年に映画法が成立し、文化映画の上映が義務化されたのにもなつて、このジャンルの作品が大量に作られるようになった。表8がその傾向を良く反映している。そのような時流に乗って、数多くの廉価な短編の文化映画が量産されたわけだが、中には、技法的、映像的に優れ、後々にまで語り継がれる佳作も多く生まれた。表中でも、すでにこの以前から教材映画で質の高いフィルムを製作していた十字屋映画部の作品群や大毎東日映画の『阿波の木偶』、科学映画で異彩を放っていた理研映画の『雪と熱』などは、当時でも高い評価を受けていた。国策趣旨を劇映画仕立てにした、『明けゆく土』、『華やかなる幻想』などが一九四三年頃に、巡回映画で使われていたことがわかっているが、その外に、これらのうちどれほどのものが、農村に持ち込まれたかは定かではない。しかし、その製作意図から推して、比較的多くが利用されたのではないかと推測できる。

巡回映画と国策宣伝活動

巡回映写会は、このように、国策趣旨に沿った映画を上映すること、その普及徹底を図る役割を果たしていたが、その上に、さらに、農村民の戦意高揚、時局認識徹底を図るための施策が付け加えられることも多かった。産業組合

表9 国民儀礼の次第について

1. 国民儀礼の前に

イ、『みたみわれ』、『愛国行進曲』、『海ゆかば』などのレコードを放送。

ロ、ベル（場内の照明を落とす）

ハ、幕上がる。

ニ、舞台正面に日章旗、その前に出演者整列する、出演者の服装はなるべく、男は国民服乙号、女は標準服、モンペ、若しくはそれに類する簡素なもの（以下略）

ホ、略

1. 国民儀礼の次第

イ、『開演に先立ちまして、この激しい決戦下にもかかわらず、このように芝居を楽しみあうことができる日本国民の幸せを、心から感謝いたしまして、唯今から厳粛に国民儀礼を行いたいと存じます、皆様ご起立をねがいます』

ロ、『一同敬礼』（省いてもよい）

ハ、『宮城を遙拝いたします、宮城の御方向にお向きください』あるいは、『正面の国旗を通して、宮城を遙拝いたします』

ニ、『宮城に対し奉り最敬礼（二呼吸）なおい、もとの位置におなおり下さい』

ホ、『護国の英霊に感謝を捧げ皇軍将兵の武運長久祈願致します』

ヘ、『祈念はじめ』（このとき『海ゆかば』のレコードをかけるのが一番効果的で厳粛な空気で場内を満たすことが出来る、しかし、それが出来ないときは、祈念の長さは、三呼吸ほど）

『祈念を終わります』

ト、（大詔奉戴日とか、記念日には、ここで短い挨拶をする）

チ、『一同敬礼』（省いても良らしい）（リ、又は略）

大政翼賛会『大政翼賛』昭和18年9月8日より

や翼賛会の組織的動員にとって、映写会という娯楽性の高い催しは、都合が良く、また、実際に、これまでの巡回映写会の記録に見るとおり、会場はいつも満員の盛況だったのである。

映写会の冒頭で必ず行われていた国民儀礼もそのひとつであった。そのやり方について、劇場興行の場合であるが、一九四三年に入って定型化されたものを表9にまとめた。これは、都市の劇場の場合なので、農村での巡回映写会とは違うが、基本的な部分は同じであった。農村での映写会の場合は、レコードなどをかけることはあまりなく、『海ゆかば』の斉唱を行うことが多かった。また、開演前の趣旨宣伝の挨拶は、映写会の場合には、記念日に限らず、必ず盛り込まれていることが多く、産業組合や翼賛会などの主催者の挨拶と、農山漁村文化協会や移動映画協会などからの巡回映画の趣旨説明が開演前にあるのが通例であった。

農村民が集会する映写会で、こういった儀礼行事を厳かに執り行うことで、国策趣旨宣伝や戦時意識の徹底を図ろうとした当局者の意図は明らかである。

また、一九四〇年代になると、〇〇強化週間

や増産強化月間といった戦時動員のための官製的な運動が日常化するが、その一つのイベントとして、巡回映画会が組み込まれる例が増えていった。表3からもそれは読み取れる。そういった運動への農民の結集力を引き出す上で、娯楽的要素を多分に持った映画会の効用は大きかったと考えられる。また、実際に銃後後援活動が、映画会の機会を通して行われる場合もあった。次の慰問文集などはその典型であろう。

一九四三年、軍事援護強化運動の一環として各地で開催された巡回映画会では、観覧者はそれぞれ慰問文を持参することになっていた。高知県と徳島県のそれぞれ五ヶ町村での実績が報告されていたが、高知県の場合は、観覧者一八八六人に對し、集まった慰問文は一一三一通に上った。また、徳島県の方は、二九三〇人の観覧者に對し、未報告分があり、判明しただけが一八八三通が集まっていた。同じ時期、同様の報告が、北海道、岐阜、三重、秋田、山形、岩手からも寄せられているとあるから、各地でこのような取り組みが行われていたことがわかる。

こういった役割をも合わせて担いながら、巡回映画活動は、相当の規模で全国的展開を果たしていたのである。しかし、四三年中のそのような活動をいつまで維持できたのかは明らかではない。巡回映画活動の中心となっていた映画配給社では、四四年に入ると、男子就業禁止令などによ

り人員確保が困難となり、部局及び支部組織の大幅削減を行っていた。その際移動映写隊員の確保、養成が急務であることが叫ばれていたから、ほぼこの頃を境に、その活動力は急速に衰えていったと思われる。

まとめにかえて

日中戦争の全面化、長期化にともなう食糧事情の悪化の中で、俄かに喧しく叫ばれるようになった農村文化問題は、ある意味では、非常に単純明快な内容であった。労働力不足や資材、原料不足による農業生産条件の悪化にもかかわらず、日増しに高まってくる食糧増産の要請に応えるべく刻苦する農村は、しかし、息付くための慰安すらなく、精神的安寧を得るための娯楽にも乏しい。片や都会は、その農村から見ると、到底戦時とは思えない、総動員体制とは考えられない文化的施設に満ちている。今こそ、都会的文化施設の農村への「移流」が果たされるべきであるというこの論調は、戦時における人的資源、国民食糧の源泉＝農村という前提の上になつて、それなりの正当性と説得力を持った。そのため、時の「流行」語となり、「思わせぶりなジェスチャー」「媚態」などと評されながらも、その実現への施策が取り組まれたのである。

一方で、映画もまた、戦時だからこそその発展をとげてい

た。満州事変によってニュース映画が発展のきっかけをつかんだように、また、映画法を境に文化映画の時代がおとずれたように、戦争と映画は常に密接な関連をもつて推移していた。もちろん、ハーイが指摘したように、国民教化を「教室」を舞台に、主に「国語と修身の教科書」によって果たしてきた伝統のために、映画を国内向けプロバガンダという方策は、かなり慌ただしくセッティングが行われ、「国策映画」というカテゴリーが唐突に準備された。しかし、映画法が成立する一九三九年頃には、国家の宣伝製作の有効な道具として映画を用いることは規定の方針となっていた。

この流れの一方で、劇映画を中心に、映画そのものは、大衆娯楽の代表として急速に人々の間に溶け込み、定着していた。それはまた、常設館を備えられるという点で、都会的な娯楽の代表でもあった。

戦時食糧増産を背景とした農村文化問題、戦時国策宣伝の道具としての映画、都会的娯楽の代表としての映画。農山漁村向けの巡回映画は、これらの要素が絡み合う中で生まれ、その活動の展開が促されていったと考えられるのである。

では、その活動実態はどのようなものであったのだろうか。一九四〇年代に入って本格化する巡回映画班の活動は、全国的規模で相当の広がりを持っていた。情報局の指示によ

り、一元化された組織である移動映写連盟が作られる以前から、そのような展開の状況は確認することができるのである。農村への健全娯楽の供給という共通の目的を持ちながら、組織的統合が図られる以前は、翼賛会や産業組合などが、それぞれの意図に応じて映写班を派遣するしくみかとられていた。しかし、巡回映写会そのものの方法は基本的に同一であり、とくに、上映される番組にも相当の共通性があった。器材を抱えての移動の苦労や、電圧不足やフィルム切れに悩まされる様子が綴られた映写班の活動記録からは、しかし、共通して、常に多くの聴衆がスクリーンの前に鈴なりになっていた情景をうかがうことができた。

その映写会は、戦意高揚映画や国策宣伝映画の上映という本来の目的のほかに、国民儀礼による国体観念の鼓吹や、慰問文集めといった銃後援活動への動員の場としても活用された。当時に映された「国策映画」が、聴衆にどのような影響を与えたかを図ることは難しいが、少なくとも、娯楽を求めている集まりという、動員効率の高い場での国策宣伝は——勿論、違和感もち、いぶかしく思う人々はいたにしても——それだけで一定の成果をあげていたといえるだろう。

巡回映画での上映映画が国策宣伝効果をどれほど持ち得たかという点については、さらに以下のようなことを検討

しながら、明らかにしていかなければならないだろう。一つには、映画国策といい、映画法による統制といいつながら、例えば、文化映画の明瞭な枠組みを打ち出せなかった当局の映画政策そのものをどのように評価するかという点である。また、もうひとつには、巡回映画に使用されたフィルムはもとより、それらの作品評価を丁寧に行う作業が必要であらう。また、ここでは、巡回映画の送り手の側からの検討に終始してしまったが、当然、受け手の側、すなわち農村の側からの視点が必要になるだろう。

注

- 〈1〉 田中宇「戦時農業統制」『日本ファシズム期の国家と社会 2 日本戦時経済』東京大学出版会、一九七九年。清水洋二「食糧生産と農地改革」『日本帝国主義史 3 第二次大戦期』東京大学出版会、一九九四年。
- 〈2〉 農林大臣官房企画課「戦時体制下の農林政策」一九三八年十月。拙稿「日中戦争の拡大と農業政策の転換」『歴史学研究』五四四号、一九八五年八月。
- 〈3〉 『農林水産省百年史』一九八一年。拙稿「戦時下農業政策の特質」『二橋論叢』一九八五年。
- 〈4〉 食糧増産運動については、田中前掲論文及び清水前掲論文。但し、両者では、時期区分に違いがある。皇国農村確立運動の資料については、楠本雅弘・平賀編『戦時農業

政策資料集』柏書房、一九八八年・八九年。

〈5〉 有馬頼寧「社団法人農山漁村文化協会に就いて」『農政研究』一九卷四号、一九四〇年四月。

〈6〉 農村文化の問題が喧しく叫ばれたのは、戦時期に固有の現象ではなかった。それまでの流れを細かく跡付けることは難しいが、一九二〇年代の日本資本主義の飛躍的な経済発展の時期に、一つの節目を見出すことはできるだろう。第二次産業、第三次産業の著しい伸張が、都市の顕著な肥大化をともなつて展開し、生活実感におけるその華やかさやサラリーマンの働きぶりが、農村の生活との違いや農業の不利性を際立たせ、そのコントラストの中で、農業保護の問題の一環として、農村文化のあり方が問われたのである。

都会的文化への憧憬を背後に負いながら、むしろ、都会的風潮に農村青年が浸り、農業嫌忌、都会への流出という道筋をたどることを防止すべく、農本主義の色合いを多分に強めながら、反都会主義の農村文化論が展開された。都会Ⅱ軽佻浮華、農村Ⅱ質実純朴という基本的構図が定着したと考えられる。そして、一方で、農村の文化的立ち後れを是正することの重要性が叫ばれ、純朴勤儉の美風を堅持しつつ、明るく文化的な農村を建設すべきことが強調された。産業組合機関紙『家の光』などにその論調は顕著に見られた。また、この特徴は、後述するように、戦時期の農村文化問題でも共通していた。

〈7〉 ピーター・B・ハーイ『帝国の銀幕』（名古屋大学出

版会、一九九五年）、清水晶『戦争と映画』（社会思想社、一九九五年）などの最近の仕事をはじめ相当な数にのぼる。

ここでは、そのうち、戦時期の農村映画の問題を考える際に参考となるものだけを若干列挙するにとどめる。より細かくは、拙稿「戦前日本ニュース映画史」（『白梅学園短期大学紀要』三二号、一九九五年）を参照。映画史全般にわたるものでは、田中純一郎『日本映画発達史』全五巻（中央公論社、一九八〇年）、同『日本教育映画発達史』（蝸牛社、一九七九年）、『講座日本映画』全七巻（岩波書店、一九八六年）、辻恭平『事典映画の図書』（凱風社、一九八九年）、野田真吉『日本ドキュメンタリー映画全史』（社会思想社、一九八四年）、戦争と映画の問題では、櫻本富雄『大東亜戦争と日本映画』（青木書店、一九九三年）、NHK取材班『日本の選択 4 プロパガンダ映画のたどった道』（角川書店、一九九五年）など。

〈8〉 古瀬伝蔵「農村映画事業の重要性と其の具現化」『農政研究』一八巻六号。この後、次のような都会批判が続く。「翻って都会地に於ける実情を大観する時に農村人としては夢にも想像の出来ない呑気さ加減である。視よ、デパートの雑沓さを、劇場、映画館の超満員さを、花柳界の繁盛振りを、カフェーや飲食店の満員振りを、凡そ戦時下とか非常時下とか、国民精神総動員とか、銃後の護りとか云ふ言葉とは縁のない生活振りである」。

〈9〉 山口弘道「皇国農村確立促進方策と農村文化問題」『農村文化』二二巻七号、一九四三年七月。山口は、農村

省農政局技師。

〈10〉 河野八郎「農村生活と農村文化」『農村文化』二〇巻二号、一九四一年二月。

〈11〉 高橋芳郎「農村に於ける文化の享受と創造」『農村文化』二〇巻三三三、一九四一年三月。しかし、この後、「文化財と称するものの中にも必ず健全であるといえないものもあり、農村に於ける伝統的な美風を批判したり破壊したりするような結果に陥ったりする様なものは警戒する必要がある」と、都市に軽佻浮華の農村への流入には敏感な姿勢を示していた。また、映画事業に携わる人々の側からも農村と映画について発言は多くあった。例えば、高季彦「農山漁村と映画との問題」『映画評論』一卷一号、一九四一年一月）は、農山漁村への慰安、娯楽の提供として映画が重要であることと、農山漁村の実情を映画によって周知させる役割を映画界は担っていると主張し、「映画をいつまでも都会生活者の占有物にとどまらせておいてはならないという自覚」が必要であると強調していた。

〈12〉 鍵山博史「農村と農村文化」『農村文化』二〇巻二号、一九四一年二月。

〈13〉 「農村文化」二〇巻二号、一九四一年一月。

〈14〉 「農村文化」二二巻一〇号。これらの要望は、もちろん、内容的には多岐にわたっており、具体的なものでも、演劇や音楽、ラジオ普及といった内容もあったが、総じて映画を第一に掲げる答えが多数を占めていた。

〈15〉 有馬前掲。次の引用も同じ。

〈16〉 古瀬前掲。

〈17〉 前掲『農村文化』二三卷一〇号の特集記事。すでに、国民精神総動員運動が始められた頃から、農村では、経済更生委員会組織があるにもかかわらず精動運動の委員会を作ることにについて「屋上屋を架する嫌い」といった批判や、また、講演会などについても、「県庁の役人が自動車に乗り来り、講演三、四〇分を為して帰るが如きはさなきだに農事に忙殺され居る農民に、余りにも実益なく、却って不平あり」とか、「農村に於ける三〇分乃至一時間の内容空疎なる御役目的講演」が「余りに農村の実状に背馳する」ものであるといった批判は相当出されていた（企画院産業部『日支事変下農山漁村実態調査報告』一九三八年六月）。こういったものの繰り返しより、娯楽性のある映画をという要望が強かったのである。また、映画法が審議された七四議会でも、「積極的に政府自身が、国民精神総動員に二百万円も金を出すならば、半分でも宜しい、之（映画：引用者）を持って来てどんどんなる必要があると思う」（前川正一「農村国策宣伝と映画」『農村文化』一八卷九号、一九三九年九月）といった発言が聞かれた。

〈18〉 農山漁村文化協会「農村文化運動の進展を期す」『農政研究』一九卷七号、一九四〇年九月。

〈19〉 『映画技術』昭和十六年十二月号、一九四一年十二月。

〈20〉 今村太平「映画の宣伝力」『映画評論』昭和十七年二月号、一九四二年二月。

〈21〉 この点については、移動映写の項で具体的に触れる。

また、国策宣伝、思想宣伝の具としての映画の効用については、情報局などでは、当然早くから着目しており、そのため、映画統制は、映画そのものの発達と全く同一歩調で行われ、その統制のもとに、政策的にリードされながら映画の普及が進められるという特殊性を持っていた。これらについては、奥平康弘「映画の国家統制」前掲「講座日本映画 4」、ハリー前掲書、前掲拙稿「戦前日本ニュース映画史」などを参照。ただし一方で、映画法においても、映画と「宣伝」の接点が明確化されていたのは文化映画のみであり、津村秀夫などが、プロパガンダの問題が軽視されていることを批判していたとするハリーの指摘は重要であろう。

〈22〉 この点及び文部省の巡回映画については、以下のものを参照した。「教育映画の市場」『映画国策』二卷二号、一九三八年二月。「文化映画製作者の立場——吾国教育映画の発達と現状——」『映画国策』二卷六号、一九三八年六月。田中前掲「日本教育映画発達史」。

〈23〉 田中前掲「日本映画発達史」。

〈24〉 この日本の宣伝映画の「不器用な『時局臭さ』」に対して、ソ連とドイツは、「プロパガンダを『芸術形態』に変貌させることに關して、めざましい躍進を上げていた」とするハリー前掲書の指摘は興味深い。

〈25〉 徴収する場合は、大人十銭、子供五銭以下。また、映画班派遣費用は一日一回につき三十円であった。

〈26〉 松崎繁「農山漁村と映画の問題」『映画評論』昭和十

六年十一月号、一九四一年十一月、及び田中前掲『日本映画発達史』三卷。他の団体の活動についても同じ。

〈27〉『映画配給社報 社内版』一九四三年九月十五日号。

〈28〉巡回映画組織の統合について簡単に触れておく。映画法の成立により、映画製作会社、映画雑誌などの出版社の整理統合が進められ、それにもなつて、フィルム配給に關しても、社団法人映画配給社が設立され、完全に一本化された。一九四二年初頭である。巡回映画についても、一元化の動きはあつたが、もともと、異なつた母体によつて、独自の展開を果たしてきた経緯があり、映画統制全体とは必ずしも同一歩調では進まず、組織としての整理が遂げられたのは、しばらく後であつた。

映画配給社設立後、その中に開発普及部が設けられ、そこに、東宝と日本映画社の移動映写隊が吸収され、統合への一歩が始まつたが、さらにそこに、読売、朝日、毎日の各新聞社の移動映写隊など、合せて七つの組織が加わり、巡回映画の一元化が図られたのは、一九四三年八月であつた。日本移動映写連盟である。ただし、この機関は、実働部隊を持つていたわけではなく、各移動映写隊の活動を統括する役割を担つたにすぎず、実際の活動は、従来通りの組織で行なわれていた。

田中前掲『日本映画発達史』三卷では、移動映写事業は、配給面資材面から積極的な応援がなく、興行場との軋轢、移動用のフィルムが調達できないなどの点で、運営に円滑を欠き、東宝映画が無償で提供した『燃ゆる大空』『九段

の母』など十数本フィルムでかろうじて地方の要望に応へたとなつてゐる。また情報局の肝入りで移動映写連盟となつてからこれらの点が改善され、結成以来十か月で、映写回数二万八千回、観客人員一六〇〇万人という記録を作つたとなつてゐるが、以下の活動状況などによつても、これ以前から、相当規模の展開を示しており、また、映写会の内容も充実していたと考えられる。

〈29〉ハイは前掲書で、ニュース映画に代表される、この「ドキュメンタリー・リアリズム」の楽しみが、「民衆の目を開かせ」、「昭和十年代（一九三五—四五）の美意識を形成する決定的な要因となつた」と指摘している。

〈30〉秋山六郎『農村巡回映写日記』『農村文化』二〇卷二号、一九四一年二月。

〈31〉巡回映画に加わつた映画技術者たちは、その矜持から、完璧を期そうと努め、器材や電圧のトラブルに相当過敏になつてゐたが、受け手の聴衆の側は、悠揚たるもので、むしろそういったことも含めて、映写会そのものを楽しんでゐる風情があつた。

〈32〉富田金吾『移動映写雑感』『農村文化』二二卷六号、一九四三年六月。次の引用も同じ。

〈33〉例えば、一九四二年の初頭に東宝が秋田県で行つた移動映写会の記録によると、先の田中の指摘にあつたように、『燃ゆる大空』と『九段の母』を頭に、『ロッパの駄駄子父ちゃん』という余興映画をトリに持つてきて、その合間に、漫画と文化映画を三、四本加えていた（清水敏夫「吐

夢さんと巡回映画」『映画評論』一九四二年二月。

〔34〕しかし、それがどれほどの効果を持っていたかを判断するのは難しい。娯楽としての映画鑑賞とこのような儀式とのミスマッチに戸惑う人々も少なからずいたようである。ある映写技師は、次のような記録を残していた。

私は、改めて開会を宣し、宮城遙拝、黙禱、海ゆかばの斉唱を行った。大人の中には初めての人もかなりあるらしい、間誤間違しているのが、単に活動写真を見に来たのだといった容子を如実に現わし、改まった国民儀礼が如何にもとってつけたようの中で微笑まされるのであった。(魚好辰夫「移動映写日誌」『農村文化』二二卷五号、一九四三年五月)

〔35〕『映画配給社報 社内版』一九四四年一月一日号。

〔36〕『映画配給社報 社内版』一九四四年三月一日号。

〔37〕ピーター・B・ハーイ前掲書。